

七ヶ浜レポート 11月

足湯（土日・イベント時など随時）

身体も心もほっこり～♪

震災から8カ月目に入り、住民の皆さんの暮らしもようやく落ち着きを見せ始めました。しかし、同時に仮設住宅という仮住まいの不便さ、今後の本格的な生活再建に向けての焦りや不安、先行きの見えない状況と戦う心の揺れなど、狭い仮設住宅でひとつの家族が互いに気を使いながら、身を寄せ合って生活している暮らしの風景が、会話の端々に見受けられます。



地元の方は、足湯を通じてのボランティアさんとの出会いや再会を大変楽しみにしています。寒さ厳しい冬に向かうにつれ、足湯や人との出会いが更に心を暖めることになるでしょう。話をする場所を必要としている方々が多くいらっしゃる、人が集まる場所に来ることで、忘れられていないと感じることが何よりも救いになるという声も聞かれています。

～つぶやき～

- ・ここに来ると津波のことを忘れられる。気が紛れるからね。友達もいっぱいできて楽しい。
- ・大きなガレキは取ってもらったけど、ガラスとか瓦とかが落ちていて、草取りしに行くけど危なくて…。
- ・寒さが気になるから暖を取れるものが欲しいわ。でもストーブを使うのがこわい。
- ・近くにお医者さんがあまりいないから、通院が大変なんだ。
- ・ボランティアの方に来てもらって本当に嬉しい。自分より年上の世代の人が多くと話が合わないことがあるからねえ。
- ・最初の頃は暗い気持ちになっていたけど、くよくよせずに今1日を暮していくことが大切なんだよね。
- ・家に居ても一人だからいつもここ（集会所）に来てんだ。だんだん知っている人が増えたから楽しいよ。
- ・障害を持つ娘とぜんそく持ちの夫がいたから避難所に入らず大変だった。仮設に入れた時はホッとしたけど、2年半という期限付きなので、だんだん焦ってきた。

- ・ここ（集会所）でガヤガヤ話しているのが気がまぎれていい。
- ・孫が家さ建ててくれたんだが、津波で流されてねえ…まだローンが10年も残っているのに…。やっぱり話すのが好きだから、こういう風ににぎやかなのは好きだねえ。
- ・この半年で52kgだった体重が33kg。今は2kg増え35kg…。おしりなんて全然丸みがなくなって平らになっちゃった。健診受けたらどこも悪くないけど、歩かないからねえ…
- ・娘はダウン症だから急に大声を出したりするから、避難所には入れなかったんだ。震災後いろいろ悩んでいたのに誰にも話せなくて…足湯で話を聞いてもらえて嬉しい。
- ・被災した話は職場では話せないんだ。ボランティアの人には話せるから、こういう場はありがたいよ。
- ・仮設に入ってからお金が出ていく一方だよ。男の人は仕事のことを考えて大変だと思うよ。お父ちゃん、お母さんは考えていると思うから、なかなか仮設の中では笑えんのよう。でも、集会所では大きな声で笑えるんよ。

七ヶ浜レポート 11月

七ヶ浜再生プロジェクト（7月～9月）

サーフィン解禁！！



震災から8か月を迎えた11月11日、七ヶ浜町菖蒲田浜でサーファーのみなさんへ、ビーチが開放されました！当日は、宮城県サーフショップユニオンからの呼びかけで地元サーファーやボディボーダーらが100名以上集まり、互いに喜びを分かち合いました。セレモニーは、追悼慰霊祭、安全祈願祭、そして14：46の黙とう後、サーファーの方々約20名が入水という流れで進みました。臨席した七ヶ浜町長からは「多くの方々のおかげで七ヶ浜は着実に復興への一歩を歩んでいる」との言葉がありました。

七ヶ浜の海は、心からまち・人・うみを愛する住民の方々に守られていることを改めて感じました。菖蒲田浜の海岸は、かなりきれいになりましたが、安心して裸足で歩くにはまだ不安な部分もあります。ガラスやプラスチックのかけらなどまだ砂に埋もれている可能性があるからです。次は、菖蒲田浜海水浴場での海開きを目指して、素足で歩ける浜を取り戻すべく、引き続き地元の方々と一緒に取り組んでいきたいと思ひます。



七ヶ浜でサーフショップを営んでいる

「SURF SHOP MATTY'S」の Hさん

「津波で店は全て流されてしまった。でも、とにかくもとの海を取り戻して、また沢山の人が集まってくる浜にしたい」

Hさんは震災直後から、たった一人でビーチクリーン活動を始められました。活動に賛同した仲間が定期的に集まり、活動に参加するようになりました。そんなHさんは、今日の日をどれだけ待ちわびていたことでしょうか。出逢ってから、数か月のこの日、Hさんの最高の笑顔が見られました。



七ヶ浜レポート 11月

ボッケ祭り (11月12日開催)

感謝・復興への思い☆ボッケ祭り！



ボッケとは、宮城県七ヶ浜町の名物である「サカナ」です。七ヶ浜でボッケを食べてもらいたい！と、七ヶ浜の漁師であるSさんが企画し、今回の「ボッケ祭り」を開催しました。

Sさんは、「復興へ向けて漁師が頑張らないと」「今まで助けてもらった人に恩返し」「漁でとってきた魚をみんなに食べてもらうことが漁師としての喜び」と、復興へと想いを馳せながら、みんなが美味しそうに食べるのを見て本当にうれしそうにしていました。

復興に向けて歩むためには、地元の人が必要不可欠。ボランティアは、地元の人と交流しながらお手伝いしていくことが大事だと実感しました。

地元の人達が一生懸命頑張って復興を目指しています。少しずつですが前へ、前へ進んでいます。



◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆
RSY現地スタッフ・松永が在学中の大分大学学園祭「聡明祭」にて、ボッケ祭りの野菜の資金を集めるために、有志に協力していただき支援金を集めました。

その時に大分の皆さんからの応援メッセージを集め、美術科にデザインを依頼し、オリジナルの大漁旗の作成をしました。



七ヶ浜レポート 11月

ものづくり工房（毎週木曜日開催）

七ヶ浜から紀宝町へ♥つながる輪

11月5日、台風12号・15号で甚大な被害を受けた三重県紀宝町へ、浦野・清水（七ヶ浜出身・きずな館スタッフ・足湯担当）で、七ヶ浜からの応援グッズを届けました。



○避難所の訪問

現在3か所・約30名の方が避難所生活を送っています。その多くは家屋が全壊し居住地を探している、又は改修が終わるまで待機している方々です。当日はお仕事やおうちの片づけなどで出かけている方が多かったのですが、「宮城から応援しています。」という言葉と共に応援グッズを手渡し、想いを託しました。



○在宅避難の方への訪問

紀宝町には応急仮設住宅は建設されず、町は民間アパートを借り上げ、半年間家賃を無料にするという措置をとりました。住み慣れた地域を離れ、新しい環境で新生活を始めたみなさん。社協さんの計らいで、これらの方々のお宅を訪問させて頂き、お届けすることができました。

♥♥ RSY清水コメント ♥♥

紀宝町の方々は「東北の被害に比べたらここは何ともない」とおっしゃっていたのですが、災害の規模の大きさなど関係なく「お互いに頑張っていきましょう！」という気持ちが大切だと思いました。カエルちゃん人形を見て「かわいい」と喜んで下さったので、直接手渡しでお渡しに来てよかったなあと思います。今回実際に紀宝町に来ることができて、また貴

重なお話も聞けたので、とても良い経験になりました。

紀宝町は七ヶ浜町と同様に復興の途中にあります。しかし、お互いを心配し合い、気遣いあう想いをカエルちゃん人形が繋いでくれ、紀宝町のみなさんに一瞬でも笑顔を運んでくれたことを、七ヶ浜町のみなさんもきっと喜んでくれるであろうと思います。今後も継続的にこの繋がりを育てていけるよう、RSYも応援していきたいと思います。



♥♥♥ 紀宝町足湯チーム「女性の会」♥♥♥

9月中旬に紀宝町に現地入りした際、避難所の方々が心身ともに相当な疲れを抱えていらっしゃる姿を目の当たりにしました。災害VCに相談をすると、すぐに地元ボランティア「女性の会」の方々が集まり、「力はないけれど、できることがあればぜひやらせてもらいたい」と 9月22日～10月11日まで、避難所の足湯チームとして活動されました。今回は「女性の会」役員さん4名がお集まり下さり、初めて足湯をした時の緊張感、印象的だった住民の方の言葉活動の中での工夫などを体験報告をしながら、お互いの知恵と想いを共有しました。

七ヶ浜レポート 11月

仮設店舗を応援しよう！

もうすぐOPEN！七の市商店街



今回の津波で大きな被害を受けた魚屋、八百屋、花屋、食堂、カイロプラクティック、床屋、美容院など、**8つの店舗**が、再建への一歩に向けて営業をスタートさせる予定です。

七ヶ浜にある応急仮設住宅は、交通網が不便な場所に設置されているため、**身近に商店ができれば、需要も大きい**と考えられます。

「買い物をする」「食べる」というのはつきりとした目的があれば、外に出かける頻度も多くなり、そこに人が集まれば、**住民同士の新たな集い・交流の場**となることも期待できます。私たちは、これが引きこもりや孤独死を防ぐための一助に成り得るのではないかと考えました。

この動きを応援するべく、RSYではこれから以下の活動を考えています。

- ・店舗で使用する機材の提供、安価での販売協力の呼びかけ
- ・店の「顔」となる看板の作成
- ・商店街を盛り上げるためのセールやイベントの手伝い
- ・他地域からの買い物ツアーのコーディネート
- ・遠方仮設住宅からの送迎サービス

商店街オープニングセレモニーに向けて様々な取り組みを考えていますのでお時間のある方はぜひご参加下さい！



出店者の想い

【カイロプラクティック】この仕事は地元でできるし、自分の体の動くうちは続けられる。地元が一番暮らしやすい。これまでの客層は70代～80代、40代～50代は半々ぐらい。特に腰痛や肩こりがひどく、**疲れもたまっているであろう40代～50代の一生懸命働くお父さん世代の方**に来て欲しい。

【花屋】**お客様の喜び顔を見ることが自分の原動力**。商売は物を売るのではなく、人を売るんだなあと考えた。仮設店舗も昔からの繋がりを大切に商売をしたい。みんなに喜んでもらえればそれでいいと思う。

【ラーメン】「**みんなの居場所・拠り所**」となるような店づくりをしたい。集会場がみんなの拠り所になっているとは思えない。いつも集まってくるメンバーは同じ。きずな館も限界がある。いずれも「行きずらさ」が要因。でも集まりたい人は一杯いる。そういう人はお金を払ってでもその空間にいたいと思うだろう。**食堂であれば出向くためのきっかけが作**

りやすい。

【鮮魚店】お客さんは大体年配者。仮設住宅に行けば、ほとんどが顔を見せてくれる。若い人でも時々「おいしかったよ～」と言ってくれる。「**この魚うまかったよ！**」と言ってもらえる瞬間が一番嬉しい。

【青果店】前の年に買った冷蔵庫も全部流され、やる気も無くしたが、**お客さんがいる限りはやっていきたい**と思いなおした。今、仮設住宅には特に50代～60代の女性の居場所がないように思う。集会場はもうひと世代上の方々のたまり場となっていて、この人たちは入りにくい状況。**この人たちの居場所が作れればとも思う。**

【美容院】お客さんのほとんどが高齢者で、気軽にお茶を飲みに来れるような店だった。髪を切りに2時間、お茶のみで1時間という感じ。**みんなの憩いの場所、拠り所となっていた。お得意さんもいるので何とか続けたい。**



七ヶ浜レポート 11月

仮設店舗「七の市商店街」

★ハッピードリーム看板を作ろう★



第1回11/20(日)、第2回11/27(日)で「七の市商店街」の看板作りを行いました。利用者の中心となる、仮設住宅にお住まいの方や地元の学生、その親御さんも参加して下さい、東北学院大学の生徒さん、名古屋造形大学の先生・生徒さんもお手伝いに来てくださって大賑わいのイベントになりました。

各々の店主さんたちの要望を取り入れつつ、デザインされた看板。幅広い年齢層の方が参加をされているので、それぞれの色が出ていて、とてもかわいくユニークな作品となりました。



看板は店主さんたちがその中から一枚に絞り、それを各店舗の看板にします。残念ながら選ばれなかった作品も12月11(日)のオープニングセレモニー時に展示してさらにその作品は、店主さんが店舗に飾ってくれるとのことです。自分の書いた絵が店舗にずっと残るので、オープン後、訪れても見る事ができて素敵ですね。

ボランティアはもちろん、地元の方が多く参加してくれたこの企画。作成の様子を見に来た店主さんたちの笑顔が、なんとも幸せそうだったのが印象的でした。